



# RIFS通信

NUMBER

34

平成19年2月8日発行

## 目次

■文部科学省「現代的教育ニーズ  
支援取組プログラム(GP):  
『小江戸川越』の国際都市化支援」

### 1. 川越の国際都市化:

言語系学部の地域貢献

..... 矢澤 則彦

### 2. English Project

Workshop科目の目指すもの

..... 川村 明美

### 3. 川越を英語で紹介する

冊子作り

..... 藤井美登利

▼ 川越「菓子屋横丁」で案内研修をする学生



## 活動内容

### 研究交流事業

- ・企業倫理研究会
- ・中東報告会
- ・ISA(Inter-school Association)
- ・日本語教育セミナー

### 広報・出版事業

- ・国際を考えるシリーズ

## 1 川越の国際都市化：言語系学部の地域貢献

東京国際大学 言語コミュニケーション学部 助教授 矢澤則彦

国土交通省の掲げている、観光大国を目指すプロパガンダ「Yokoso Japan!」の掛け声で、観光立国並みの外国人観光客誘致をねらう日本。そうした流れの中で、地方都市もその責務の一端を担う必要性がでてきている。2003年4月に、東京国際大学の川越は「中核市（全37都市）」の仲間入りをし、市民経済、民生を支える責任がより一層高まった。一方、市内には当大学を含めて5大学が存在しており、2007年現在、市域昼間人口約30万人のうち5%程度が大学関係者であることが推計され、大学は最低でもその割合に応じた地域貢献が求められているといえよう。

少子・高齢化時代における大学の社会貢献あり方を模索する課題に直面し、2004年度創設の東京国際大学言語コミュニケーション学部は、「言語」を地域貢献に生かすことを目標の一つに据えた。しかし、観光系の学部ならまだしも、言語系の学部である。言語で地域貢献ができるのが最大のポイントであった。大学が位置する川越市は小江戸と呼ばれる観光地を擁している。川越は、江戸の粋な面影を今に伝える活気溢れるまちである。そうした歴史ストックを学問的観点から発掘・分析して、それを海外へ発信し、外国人観光客に魅力を伝えられれば、多大なる地域貢献に結びつくのではないかと。しかもその発信先は漠然とした海外ではなく、姉妹都市で、かつ、当大学のキャンパスのある米国のセーラム市とすれば、情報供給先としてのターゲットと国際観光都市化への需要とが絶妙にマッチングし、地域貢献の陣旗も掲げやすい。

そうした夢を実現すべく、東京国際大学言語コミュニケーション学部は平成17年度に文部科学省が推進する現代的教育ニーズ取組支援プログラム(略称:現代GP=Good Practice)「地域貢献」の部に採択され、3ヵ年(17年度～19年度)にわたる支援予算を獲得することができた。これは全国509の大学・学部が申請し、本学を含む84件のプロジェクトしか採択されないという厳格な審査選抜状況の中、学部が志向する「仕事に使える英語教育」に「地域貢献」をうまくビルトインさせたプロジェクトであるとの点が大大的に評価されたことを意味している。

昨今のマスコミの大学評価は大変手厳しくなっており、文部科学省が掲げる「研究力」「教育力」の向上を一連のプロジェクトの採択数でランキングするようになってきている。東京国際大学は川越市に位置する他大学と比べると「地域貢献」可能な関連教育分野は明らかに劣位である。是が非でも現代GPで予算を得て地域貢献の羽根車にさせていただくことは至上命題であった。川越に工学系キャンパスを持つ東洋大学は、これまで観光の中心街である「蔵造りのまち」の「蔵」自体を構造工学的に診断する機会を実践的に提供することで地域に貢献してきた長い歴史を持つ。芸術系の東邦音大・尚美学園大学はまちおこしには欠かせない企画策定やイベント創造に手堅い。栄養大学は国家プロジェク

トになっている「食育」のお世話をするといった本来の教育内容に支えられたソフト提供が可能。他大学はそんな均整のとれた素地を有している。わが大学にはその名前に「国際」の冠をもちながらも、「国際」で地域に即座に貢献できるハードはなにか、ソフトはなにかと考えると、そのセールスポイントが曖昧模糊となりがちである。現代的課題を抱える以前の大学であれば実学を売りにして、卒業の段階で実践的に役立つ学生を送り出せばよいといった評価軸が存在したが、昨今は在学中の学生と教員がなんらかのかたちで社会貢献を標榜しなくてはならなくなってきている。

ところで、地域貢献という単語を耳にすると、慈善活動が偽善活動に主客転倒する危惧が想起されがちであるが、実際は全く異なり、必要なのは信念のみといえる。地域貢献は、たとえその行為がいったんは偽善と評価されようとその団体が地域に存在する証としてありのままを曝け出し、認められるまで試行錯誤を繰り返す。その結果、「当該団体が地域から姿を消すと地域の発展が著しく阻害されるのでは」といった懸念が容易に予測されるほど「深く地域に根ざして」初めて地域貢献をしているといえるのである。地域貢献活動を単なる公開授業を通しての知識の一方的提供活動と取り違え、フィードバックなしで気づかないうちに批判側、評価側に回るなどというようなことがあってはならないのである。

ではそういった「地域の発展に深く関与する」にはどのような活動が有効なのか？我々が試行錯誤の中から注目した手法は、「まちおこしのプロセス=方法論自体」を「地域と関わる中から探り出し」それを、教育に結び付けて提案してゆくことであった。地域貢献の先達、川越シルバーガイドボランティアのみなさんの懐をお借りし、「学生による川越ガイドボランティア活動」を推進し、そうした体験の中から小江戸川越の取材先を発見する。さらに、「プロジェクト実践型の成果授業:English Project Workshop (EPW)」に結び付け、英語パンフレット、英語ホームページ作成する。また、既にタウン誌を出版し活躍されている先生をお呼びし「川越を英語で紹介する冊子」制作を学生に参加させて編集発行へと導いていただく。さらに編集作成時の取材元へは情報還元=フィードバックを忘れないようにする。こうした一連の地道だが深遠な知識の環流作業を我々は『地域まるごと翻訳』と命名して纏め上げようとしており、その活動は広く新聞、テレビにも紹介され非常によい形で認知され昨今に至っている。

以下、当該地域貢献活動に関する、先生と学生が一体となった奮闘振りを二人の先生が紹介します。

本学部の English Project Workshop (EPW) I～IV は、英語スキル科目の中でも「プロジェクト型体験学習」という教育目標を持つユニークな科目である。このプロジェクト型体験学習とは、「学生は社会との関わりを持ちながら実践活動を行い、自らが参加・体験しながら学びあう」というものである。換言すれば、「地域を発見し、分析し、紹介する」という実体験を学びの中心としながら、社会に通用する実践的な英語コミュニケーション能力を身につけていく、というものである。

本学部は、平成 17 年度文部科学省現代 GP の採択を受けることになったのであるが、その要諦は、「川越市の歴史と観光資源を再発掘するとともに、川越市の国際都市化および活性化を支援する」というもので、この EPW I～IV 科目を履修する学生たちの活躍の場が公に与えられたということになる。

本学のホームグラウンドは川越市霞ヶ関であるが、しかし、川越の歴史、事物を深く知る人や地域との関わりを持っている人はクラスの中にほとんどいない。かく申す筆者も全くの「ストレンジャー」である。GP 取組みのメインプログラムという榮譽に喜びながらも、与えられたテーマに、はてさて本当に取組めるのだろうか、と不安と危惧を抱きながらのスタートであった。

まず、学生は、グループごとに話し合い各自のテーマを決める。「川越の生き字引」とも言える地域を良く知る方々の講義を聴き、図書館で資料収集をしたりパソコンを駆使して情報検索を行い、徐々にテーマの核心をとらえていく。これらの作業は毎回、Working Report として email や印刷物で提出される。そして最終的に英文のパワーポイントスライドやホームページにまとめ、クラス内で発表会を行い、各自の作品を評価しあう、という流れである。もちろん、授業の本流としては、ボイスレコーダーやデジカメを携えて教室を飛び出し、現地を探訪することである。本学のスクールバスや電車を利用して、筆者も学生とともに市の博物館、寺院、城跡、まつり会館、蔵づくり資料館、老舗の店舗などを数回訪れた。なかでも「まつり会館」は川越学生ボランティア活動の拠点として場所を提供していただいている川越市の施設でもあり、お世話になることが多かった。



(川越市「まつり会館」資料コーナーで調べものをしている学生)

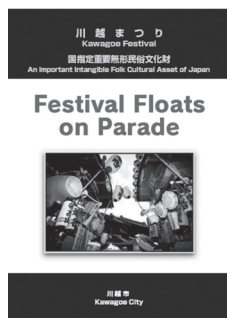
時間割上どのクラスも午後の時間帯なので、諸注意を与えていざ目的の店舗に向かってみると、職人さんたちの作業が終わっていたり、営業さえも終了していたり、と授業時間の中でその日の

目標を到達させることは結構大変で、学生たちの中には、次回のアポイントを取ったり、スケジュールを組むのに四苦八苦していた者もいた。(川越市内の商店の多くは観光客が帰路につく 5 時前後には店を閉めるのですね。皆様ご注意ください!) しかし、学生たちは手作りの名刺を持参して、恐らく初めてであろう「名刺交換」なるものを経験したことは多少とも意義あることではなかったかと思う。

この「川越を知る」というテーマの中には、川越市の最重要行事である「川越まつり」(国指定重要無形民俗文化財)の「山車の英訳」も含まれており、担当した学生たちは、二重鉾、唐破風、囃子…など、見慣れない漢字にとまどい、辞書で確認して何とか読めても、それらがどういうものか分からない。そこで、川越市のまつり会館へ行き、館長さんのお話やビデオなどを参考にして、頭をひねりながら英訳作業を進めていった。そして、大いに悩みながらも次第に川越の歴史や川越まつりにも興味を抱くようになった学生が出てきた。

プログラム開講当初は、「必修科目だから」「4 単位もらえるから」と、消極的な、何かしら冷めた気持ちでいた学生も、「自分の大学がある街なのに全然知らなかった。川越って、こんなに素晴らしいところなんだ!」と感慨深げに感想をもらすようになったことは、自分たちの努力の結果が立派な小冊子として出来上がった喜びもさることながら、EPW の教育目標である「プロジェクト型体験学習」から得た大きな収穫であったと思う。

さらに、川越まつり当日(去年は 10 月 14、15 日)には約 110 万人の観光客の前で本学部の 3 年生 2 人が英語でこの山車の説明をし、読売新聞にも大きく掲載されたという、本学にとっても画期的な名誉を戴いた。この小冊子は、まつり会館や川越市の観光協会を通してこれからも外国人観光客や希望者に配られる。



(川越祭りの日に新聞社から取材を受ける学生)

もうひとつオマケとして、筆者にとっても「小江戸川越いじけたストレンジャー」から「堂々たる川越サポーター（または予備軍）」に変身できるかもしれない、という希望の光がみえてきたことである。

県外から通学する学生たちには第二の故郷としてより身近になった川越の街を、世界中の人々に向けて発信していく。こうした学生たちの取組みは、今後なお一層熱が入っていくことであろう。

### 3 川越を英語で紹介する冊子作り

東京国際大学 言語コミュニケーション学部 非常勤講師 藤井美登利

人生は本当にどこで扉が開くかわかりません。大学とは全く無縁の生活を送っていた私が、今年4月から毎週、川越を英語で紹介する冊子作りの講義を担当しているのですから…。



(江戸時代からの時の鐘)

今から13年前、たまたま観光で訪れて気に入ってしまった川越に、東京から「景観難民」として移住。当時、外資系航空会社の乗務員として東京とロンドンを往復する生活を送っており、1週間留守にしている間に町並みが変貌している東京と、かたや、曾おじいさんが見ていた町並みを曾孫も見ながら暮らしているロンドン。この対照的な二つの都市から得たものが、今の私の活動の核になっているようです。経済優先の中、変えてはいけないものまで、なし崩しに変わっていく東京の町にはっきりと言ひ表せない喪失感を感じていた頃、川越の町を訪れ、江戸時代から同じ場所で同じ形で時を告げている「時の鐘」や昔ながらの町並みを見て、東京の忘れ物を見つけたようで、ほっとしたものです。

関東では日光、箱根、鎌倉に次ぐ観光地として近年テレビや雑誌でもよく紹介され、年間350万人の観光客が訪れるという川越。蔵の町並み周辺は、関東地方では千葉県佐原市の町並みとともに2ヶ所だけという、文化庁の重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。また江戸の天下祭りの様式を残す川越水川祭礼(川越祭り)は国の重要無形民俗文化財に昨年指定されました。建物というハードと祭りというソフト、両方の希少性が認められた希少な町だと思えます。このまま日本各地が画一的で同じ様な町に変貌していけば、川越の個性がますます引き立ち、将来的には世界遺産(!!)にも登録されるのではと楽しみにしております。そんな川越で観光客と地元の人、川越の昔と今をつなぐ冊子があればと5年前に『小江戸ものがたり』というタウン誌を創刊しました。「読みたいものは自分で作ろう」と、老舗の由来や職人技、歴史になる前に消えていく「ちょっと昔のはなし」を町の人から聞き書

きをして紹介しています。仮装行列で出かけた昔のお花見や、映画にも出演した戦前の女性パイロットのお話、女学校の遠足で体を鍛えるため、川越から九段の靖国神社まで徒歩で出かけたことなど、今の私たちが聞いて驚くことばかり。

そのような活動が今回の大学と地域をつなぐ、川越を発信する冊子作りにつながっていきました。川越のまちを殆ど知らない学生たちに、いかに興味をもってもらい取材対象を見つけてもらうか。書き手本人が「面白い」「伝えたい」と思わないと読み手には伝わりません。また、川越という素材を通じて日本を再発見してもらいたいとも思っています。週末は着物暮らしを実践している私としては、普段着の着物文化を身近に感じてほしいので、明治の川越経済を牽引した特産物である木綿の着物「川越唐棧」を学生に着てもらうことも。そんな彼らがすでに選んだ題材をあげると…。組み飾りを家族総出で作っている職人家族、幕末の肥料問屋の町屋を利用したりサイクル着物店、川越祭りの山車を仕切るかしら、サツマイモの地ビール、提灯、手焼き煎餅、だるま職人、大学の近くに残る狭山茶園、城下町の名残を残す地名や掘・土塁跡、神社とお寺のちがひ、川越藩御用達の老舗の菓子商、110年ぶりの蔵造りの屋根修復工場の現場ルポなどです。

川越を訪れたことのない方も読みたくありませんか？ 本年3月にはA5判16頁の冊子として、川越市と姉妹都市である米国セラム市や市内の観光案内所などで配布する予定です。どうぞお楽しみに。また、川越の視察・町案内なども受け付けております。池袋から40分、東京の忘れ物が見つかる町、川越にぜひお出かけ下さいませ。

「小江戸ものがたり」

<http://www.koedomonogatari.com>



(川越の蔵づくりの街並)